

100年後に阿仁残したい

マタギ 「16世」 故郷へ

松橋翔さんの挑戦

上

「マタギの里」北秋田市阿仁比立内で、15代続くマタギの家に生まれ、16代目松橋翔さん(27)が今春、故郷で新たな一歩を踏み出す。現在は岩手県大槌町の地域おこし協力隊員として、シカを中心とするジビエ(野生鳥獣肉)の生産加工会社で働きながら、狩猟や解体を実践する日々。3月末で任期を終え、培った知識と経験を生かし、将来的に地元で阿仁でジビエ事業の立ち上げを目指す。「100年後の未来に阿仁を残したい」。伝統を受け継ぎながら変化を受け入れ、新たなマタギの姿を模索する松橋さんに迫った。

「いた。2頭、いや3頭か」。昨年11月中旬、岩手県釜石市。夜が明けて間もない、海沿いの林道を車で進む。松橋さんが運転席の窓から斜面の林を見上げ

名前 年組

た先にシカを見つけた。その距離約70メートル。猟銃を手に、急いで車を出る。シカはその場を離れかけたが、ふと足を止めて振り返る。松橋さんは数歩進んで狙いを定め、引き金を指をかける。「バン」。乾いた音が響いた。「どうかな」。そうつぶやいた数秒後「ドサツ、ザザーツ」。落ち葉でいっぱいの斜面を何か滑り落ちてくる音がした。弾丸は1頭のシカの右目近くに命中していた。「3歳の雄ですね。65キロくらいかな。ありがとう」。授かった命を前にその場で静かに手を合わせる。目を閉じ、実家に代々伝わる文言を素早く、小さな声で唱えた。経文のような唱え言の、最後の一言は「これより後の世に生まれて良い音を聞け」。自然への敬意を忘れないマタギの精神を守っている。

大槌町の勤務先で解体

シカは大槌町にある勤務先のジビエ生産加工販売「MOMIJI(モミジ)」の工場に運ばれ、解体されて精肉、皮、角な

どが製品になる。肉は捕獲から搬入、解体までの時間が短いほど商品価値が高いため、作業は時間との闘いだ。この日仕留めたシカは釜石市から20分ほどで搬入できた。シカ肉は低カロリー、低脂肪で人気が高い。各地の飲食店に卸されるほか、皮はポーチなどの革製品、角は犬のデンタルケア用のガムに加工、販売される。

三陸地域では東日本大震災後、ニホンジカの獣害で農林業に甚大な被害が出た。地元の人ター兼澤幸男さん(40)は、駆除後に廃棄されることも多かつ



撮影用に猟銃を構える松橋さん。普段はコンタクトレンズを使っているが、朝方の猟には眼鏡で行くことが多いという。2024年11月14日、岩手県大槌町

たシカを有効に活用しようとジビエの事業化を決め、2020年にモミジを設立した。狩猟同行と解体見学体験ツアー、狩猟者の育成なども手がけ、鳥獣被害や狩猟への理解を深める「大槌ジビエソーシャルプロジェクト」を展開している。

猟に同行し経験重ねる

松橋さんは21年、ジビエについて調べていく中でモミジの事

業を知った。「自分がやろうとしていることを、既に始めている」と感じ、大槌町の協力隊員に応募、翌年4月に着任した。ただ、マタギ家系の生まれとはいえ、実際の狩猟経験はゼロ。兼澤さんの猟に同行し、解体の現場経験を重ねながら、狩猟免許や各種資格の取得のための勉強に打ち込んだ。

「最初は『本当にマタギの子かな』と思ったが、やはりのみ

込みが早い。周りにも溶け込んで、本当に成長した」と兼澤さん。着任から2年以上が経過して解体のスピードと正確性も向上し、上司や同僚からの信頼は厚い。休日山に入り、狩猟に限らず山菜やキノコ採り、溪流釣りなどを通じて、山と向き合い続けている。

△秋田魁新報2025年1月3日付より。記事は手直ししています▽

1

本文中にある①～⑧の熟語の読みがなを書きましょう。

- ① 故郷 ② 模索 ③ 斜面 ④ 経文
- ⑤ 搬入 ⑥ 甚大 ⑦ 廃棄 ⑧ 溪流

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ⑤ | ① | ⑥ | ② | ⑦ | ③ | ⑧ | ④ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

2

新たなマタギの姿を模索する松橋さんの取り組みについて、次の(1)、(2)の問いに答えましょう。

- (1) 松橋さんが「モミジ」で経験を積む中で成長したことの一つに、「解体のスピードと正確さの向上」が挙げられていますが、狩猟の側面でも成長が感じられる松橋さんの言葉があります。その言葉を七字で書き抜き、理由も書きましょう。(七字には句読点は含みません)

| |
|----|
| 理由 |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

理由

100年後に阿仁残したい

マタギ「16世」故郷へ

松橋翔さんの挑戦

上

「マタギの里」北秋田市阿仁比立内で、15代続くマタギの家系に生まれた松橋翔さん(27)が今春、故郷で新たな一歩を踏み出す。現在は岩手県大槌町の地域おこし協力隊員として、シカを中心とするジビエ(野生鳥獣肉)の生産加工会社で働きながら、狩猟や解体を実践する日々。3月末で任期を終え、培った知識と経験を生かし、将来的に地元の阿仁でジビエ事業の立ち上げを目指す。「100年後の未来に阿仁を残したい」。伝統を受け継ぎながら変化を受け入れ、新たなマタギの姿を模索する松橋さんに迫った。

「いた。2頭、いや3頭か」。昨年11月中旬、岩手県釜石市。夜が明けて間もない、海沿いの林道を車で進む。松橋さんが運転席の窓から斜面の林を見上げた先にシカを見つけた。その距離約70メートル。猟銃を手に、急いで車を出る。シカはその場を離れかけたが、ふと足を止めて振り返る。松橋さんは数歩進んで狙いを定め、引き金に指をかける。「バン」。乾いた音が響いた。「どうかな」。そうつぶやいた数秒後「ドサツ、ザザーツ」。落ち葉でいっぱい斜面を何かが滑り落ちてくる音がした。

弾丸は1頭のシカの右目近くに命中していた。「3歳の雄ですね。65キログラムかな。ありがとう」。授かった命を前にその場で静かに手を合わせる。目を閉じ、実家に代々伝わる文言を素早く、小さな声で唱えた。経文のような唱え言の、最後の一言は「これより後の世に生まれて良い音を聞け」。自然への敬意を忘れないマタギの精神を守っている。

大槌町の勤務先で解体

シカは大槌町にある勤務先のジビエ生産加工販売「MOMIJI(モミジ)」の工場に運ばれ、解体されて精肉、皮、角などが製品になる。肉は捕獲から搬入、解体までの時間が短いほど商品価値が高いため、作業は時間との闘いだ。この日仕留めたシカは釜石市から20分ほどで搬入



撮影用に猟銃を構える松橋さん。普段はコンタクトレンズを使っているが、朝方の猟には眼鏡で行くことが多いという。2024年11月14日、岩手県大槌町

できた。シカ肉は低カロリー、低脂肪で人気が高い。各地の飲食店に卸されるほか、皮はポーチなどの革製品、角は犬のデンタルケア用のガムに加工、販売される。

三陸地域では東日本大震災後、ニホンジカの獣害で農林業に甚大な被害が出た。地元のハンター兼澤幸男さん(40)は、駆除後に廃棄されることも多かったシカを有効に活用しようとしてジビエの事業化を決め、2020年にモミジを設立した。狩猟同行と解体見学の体験ツアー、狩猟者の育成なども手がけ、鳥獣被害や狩猟への理解を深める「大槌ジビエソーシャルプロジェクト」を展開している。

猟に同行し経験重ねる

松橋さんは21年、ジビエについて調べていく中でモミジの事業を知った。「自分がやろうとしていたことを、既に始めている」と感じ、大槌町の協力隊員に応募、翌年4月に着任した。ただ、マタギ家系の生まれとはいえ、実際の狩猟経験はゼロ。兼澤さんの猟に同行し、解体の現場経験を重ねながら、狩猟免許や各種資格の取得のための勉強に打ち込んだ。

「最初は『本当にマタギの子かな』と思ったが、やはりのみ込みが早い。周りにも溶け込んで、本当に成長した」と兼澤さん。着任から2年以上が経過して解体のスピードと正確性も向上し、上司や同僚からの信頼は厚い。休日も山に入り、狩猟に限らず山菜やキノコ採り、溪流釣りなどを通じて、山と向き合い続けている。

▲秋田魁新報2025年1月3日付より。記事は手直ししています▼

3

(2) シカを仕留めた松橋さんの「これより後の世に生まれて良い音を聞け」という「経文のような唱え言」の最後の一節から、「自然への敬意」が感じられるのはなぜですか。次のア〜エの中から、ふさわしいものを一つ選んで記号で答えましょう。

ア 命を奪ったことへの謝罪の気持ちが込められているから
イ シカが次に生まれ変わってきた時の幸運を祈っているから
ウ 美しい自然を楽しんだシカの生涯に共感しうらやんでいるから
エ 次に生まれ変わるときは人間になってくるようにと祈っているから

この記事から分かる「マタギ」の特徴について、次の(1)〜(3)の間に答えましょう。

(1) 「マタギ」には、自然を畏れ敬い、その恩恵に感謝する独自の自然信仰があります。仕留めた獲物に対する狩猟者の信仰心を表現した言葉を、記事から五字で書き抜きましょう。

| |
|--|
| |
| |
| |
| |

(2) 「マタギ」は、仕留めた獲物の全ての部位を様々な用途で活用することをとおして、山の恵みに対する敬意を表します。その考え方を多くの人々にも知ってもらうためにジビエの事業で取り組まれていることを、二つ書きましょう。

| |
|--|
| |
| |

